

### 第3章 接続表現の機能および使用範囲の異同

第2章では、日中両言語の因果関係を表す複文における接続表現の使用と因果関係の度合いとの関連性について、構文要素や構文形式を考慮した上、検討を行った。

本章では、因果関係を表す複文における日中両言語の接続表現の機能および使用範囲の異同に着眼して、研究を進めていく。

日本語の接続表現は、同一表現によって、多様な原因・理由を表せる機能を持っている。これに対し、中国語の接続表現は、機能的には表現内容の制限を受けやすく、同一表現によって、多様な原因・理由の意味合いを表しきれない場合が多くあり、接続表現の使用は表現内容への配慮が必要だと考えられる。したがって、日本語の接続表現の機能は中国語より幅広いと考えられる。

日本語では、接続表現の使用は、文の性質の制約を受けにくく、広範に使われているが、中国語は文の性質によって、接続表現の使用を避ける傾向があり、接続表現の使用範囲は日本語より狭いと考えられる。また、日本語では、原因・理由を表す複文として認められているが、中国語ではそう認められていないものもある。

上記の仮説を元に、両言語の因果関係を表す複文に関して、接続表現の機能、使用条件、示された原因・理由の特徴、前後節の意味関係に注目して、対照しながら検討を行う。

#### 3.1 因果関係を表す複文の分類

##### 3.1.1 日本語の因果関係を表す複文の分類

日本語の因果関係を表す複文の分類については、モダリティ要素との関わりがあるか否かという視点から分類されるのが主流になっているようである。

南(1993)<sup>1)</sup>では構文的な観点から、従属節の内部の構造要素に注目し、従属句をA・B・C・Dの4種類に分け、階層的に分析している。この4種類のもは、ことからの世界から陳述の世界へ移行し、Aは描写段階であり、Bは判断段階、Cは提出段階、Dは表出段階であるとしている。また、南は判断段階に属するものの主文は、意志や命令の表現にはなりにくい、提出段階に属するものの主文は、意志あるいは命令の表現との共起が可能であることも指摘した。さらに、「から」「ので」「て」を取り上げ、「ので」文と「て」

文の従属節が主節の判断段階に関係するもの、「から」文の従属節が主節の提出段階に関係するものに分類している。

田窪 (1987) <sup>2)</sup> では、南の分類を修正し、B類とC類について再分類を行った。田窪は、「から・ので・ため(に)・て」の分類に関して、以下のように位置づけている。

- ┌ B類：て (理由、時間)、から (行動の理由)、ために (理由)、ので
- └ C類：から (判断の根拠)、ので

田窪は「から」を「行動の理由」と「判断の根拠」の2種類に分け、「行動の理由」をB類とし、判断の根拠をC類としている。そして、「ので」もB類とC類にまたがっていると指摘し、「て」と「ために」の何れもB類に属していると記述している。

益岡 (1997) <sup>3)</sup> では、上掲した論述を参考にしながら、原因・理由を表すノデ節、カラ節、タメ節と文の概念レベルの関係について検討を行い、「タメニ節とノデ節は現象レベルに属し、カラ節は現象レベルと判断レベルの両方に属する」と結論付けている。

蓮沼 (2001) <sup>4)</sup> は、原因・理由の表現方法を4種類に分け、「から・ので・のだから、ため(に)・て」の用法を比較した。

【表13】蓮沼による「から・ので・のだから・ため(に)・て」の用法比較

用法	カラ・ノデ	ノダカラ	テ	タメニ
1. 事態の原因	○	×	○	○
2. 行為の理由	○	○	×	×
3. 判断の根拠	○	○	×	△
4. 発言・態度の根拠	○	○	×	△

○使われる    ×使われない    △使われることもあるが制限がある

蓮沼の分類によると、「から・ので」は何れの場合も使用できるが、「て」と「ため(に)」はそれぞれ制約を受ける場合がある。蓮沼の用法分類は「から・ので・て・ため(に)」の用法を包括できるが、「行為の理由」に関して、「て」と「ため(に)」が使用されないという点において、疑問に思う。筆者が集めた用例の中で、主節に意志的動作が現れる場合、「て」の用例が多く観察された。例えば、

- (1) 啓造は何となく入りそびれ<sup>て</sup>、隣の石油スタンドの方に歩いて行った。 『氷』
- (2) ドアを開けると、私は浜田のうしろの方に彼女が寄り添っているかと思っ<sup>て</sup>、辺りを  
キョロキョロ見廻しましたが、 『痴人』

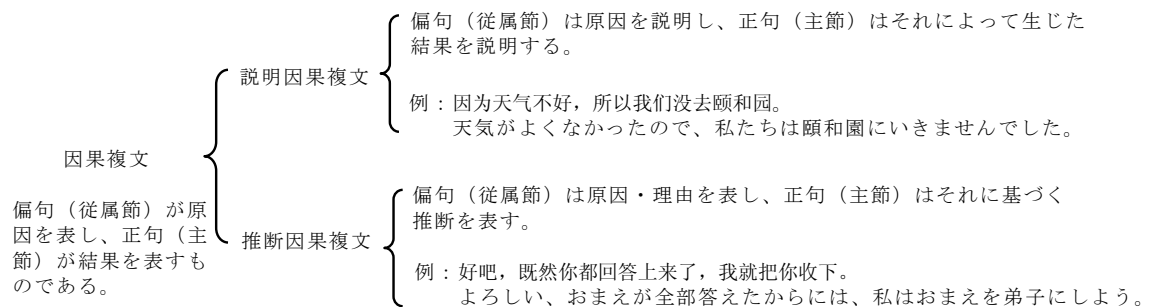
(1)と(2)のいずれも主節に意志的な動作が行われているため、「て」文とは言え、「行為の理由」も表すことができると言えよう。しかも(1)のように、従属節の述語は持続性のある状態性述語の場合、「ため」に置き換えても、自然さを損わないだろう。

接続表現の機能については、蓮沼の分析では厳密ではないところがあるが、「から・ので・て・ため(に)」の機能の違いを説明するための用法分類は妥当性が高いと思われる。したがって、本研究においては、蓮沼の分類を土台にし、モダリティ形式と共起するか否かという点を念頭に置き、「から・ので・て・ため(に)」の用法を次のように再分類する。

- ① 単なる原因・理由を表す文 (モダリティ要素が含まれないが、行為の理由を表すものを含む)
- ② 推測・判断の根拠を表す文 (なぜそのように判断・推測をするのかを表す)
- ③ 発言・態度の根拠を表す文 (なぜそのような発言をしたり、そのような態度をとったりするのかを表す)

### 3.1.2 中国語の因果関係を表す複文の分類

中国語の因果関係を表す複文の分類については、第1章で既に言及した。中国語の因果関係を表す複文の分類は、モダリティとの関わりがあるか否かといった視点からではなく、前後節で述べていることがら「已然」であるか、それとも「未然」であるかによって分類され、主に2種類に大別されている。ここで、主流になっている劉(1991)<sup>5)</sup>の分類を図示する。



【図11】中国語の因果関係を表す複文の分類

劉（1991）の分類によると、「説明因果複文」<sup>6)</sup>は上述した「単なる原因・理由」を表す複文に相当し、「推論因果複文」<sup>7)</sup>は、日本語の「判断・推測の根拠理由を表す文」に相当する。実際に、「推論因果複文」は特徴のあるもので、主観性が強く、主節には実行の当然性が高い表現が用いられるため、日本語の「からには、以上は」に相当するものだと考えられる。したがって、中国語においては、日本語の「から・ので・て・ため(に)」文との等価性を持つものは「説明因果複文」に限られている。本研究では、日本語の因果関係を表す代表的な「から・ので・て・ため(に)」と、中国語の典型的な因果関係を表す接続表現との類似性、相違性または相互の特徴を究明することを目的としているため、日本語の「からには・以上は」と中国語の「推論因果複文」についての検討は、今後の課題とする。

日本語の「から・ので・て・ため(に)」文との等価性を持つ中国語の「説明因果複文」には、多種多様な原因・理由文が含まれており、枠組みが大きいことも事実である。しかし、「説明因果複文」の説明的かつ客観的な構文上の特徴から考えれば、日本語では因果関係を表す複文として成立できるものでも、中国語では因果関係を表す複文として成立しにくい場合もあると想定される。このような仮説によれば、日本語の因果関係を表す複文の分類方法では中国語の因果関係を表す複文の分類をカバーできるが、中国語の分類方法では日本語の分類をカバーできないということも考えられる。したがって、本研究においては、日本語の分類方法に従い、3種類の因果関係を表す複文を細分類し、接続表現の機能、使用条件、示された原因・理由・根拠の特徴、節と節の意味関係に注目して、中国語との対照をしながら、検討を行う。そして、同種類の文において、両言語の重なりとずれを明確にする。最後に全体的な結果をまとめ、接続表現の使用範囲を明確にした上で、両言語の因果関係を表す複文の枠組みを明らかにする。

### 3.2 「単なる原因・理由」を表す文について

日本語では、「単なる原因・理由」を表す文では、多様な原因・理由が見られる。「単なる原因・理由」を表す文の分類<sup>8)</sup>について、先行研究やデータへの観察を通しておおよそ以下のように分類できる。この中で構文パターンとしては「原因から結果をたどる」と「結果から原因を遡る」の2種類がある。

① 事態原因を表す文	(原因から結果をたどる)
② ネガティブな心理要素を伴う行為の理由文	(原因から結果をたどる)
③ 継起関係を伴う行為の理由文	(原因から結果をたどる)
④ 自然現象変化と状態変化の原因文	(原因から結果をたどる)
⑤ 感情表明の原因・理由文	(原因から結果をたどる)
⑥ 感情評価の原因・理由文	(原因から結果をたどる)
⑦ 心理状態の変化を引き起こす原因・理由文	(原因から結果をたどる)
⑧ 説明的な原因・理由文	(結果から原因を遡る)

### 3.2.1 事態原因を表す文

日本語の事態原因を表すものは、事実だと分かっている従属節の事態と主節の事態が、原因 — 結果の関係（因果関係）を持つことを表している。

- |  |      |
|--|------|
| (3) 暗かった $\boxed{\text{ので}}$ 、お互いの顔は判らなかったが、     | 『あ』  |
| (4) 小さい草は冬の土を割って出てくる $\boxed{\text{から}}$ 根は強い。   | 『雁』  |
| (5) 観光客が居なくなっ $\boxed{\text{て}}$ 、町はもうひっそりとしていた。 | 『青』  |
| (6) お金がない $\boxed{\text{から}}$ 、旅行に行けなかった。        | (自作) |
| (7) 一日の行楽に疲れ $\boxed{\text{て}}$ 、眠っている人が多かった。    | 『青』  |
| (8) 電車が遅れた $\boxed{\text{ため}}$ 、遅刻した。            | (自作) |
| (9) 三日程前から風邪を引い $\boxed{\text{て}}$ 、熱が少しあった。     | 『布』  |

(3)～(9)の中では、「から」「ので」「ため」「て」のいずれかが使用されている。事態原因を表す複文の特徴としては、原因と結果の関係が直接結びついており、原因節と結果節の意味関係が一目瞭然であることが挙げられる。この種類の文は、モダリティ形式と共起せず、客観的に原因と結果について述べるのが特徴であるため、「から」「ので」「ため」「て」のいずれの表現も使用できる。「単なる原因・理由」を表す文においては、もっとも典型的なものだと言える。この種の文は、中国語においても典型的な因果関係を表す文になっており、もっとも多く見られるものである。

- [10] <sup>(因)</sup>由于交通堵塞, <sup>(結)</sup>迟到了十几分钟。 《作家》  
交通渋滞の<sup>(結)</sup>ために、十分ぐらい遅刻した。 (拙訳)
- [11] <sup>(因)</sup>这是睡午觉的功夫, <sup>(結)</sup>场院里外都不见人影。 《青春》  
ちょうど午睡の時刻だった<sup>(結)</sup>ので、広い庭の内外に、人影はなかった。 『青春』
- [12] <sup>(因)</sup>因为行人稀少, <sup>(結)</sup>并没有人发现他。 《青春》  
通行人が少ないところだった<sup>(結)</sup>ので、だれにも発見されなかった。 『青春』
- [13] <sup>(因)</sup>因为醋的比重比油大, <sup>(結)</sup>所以沉在下面。 《当》  
酢の比重は油より大きい<sup>(結)</sup>ので、下に沈んでいる。 (拙訳)
- [14] 小划子清早从县城开出。<sup>(因)</sup>因为<sup>(結)</sup>是逆水, <sup>(結)</sup>走不快。 《霜》  
舟は朝はやく町を出た。しかし、流れを遡っている<sup>(結)</sup>ので、舟足は遅い。 『霜』

[10] ~ [14] はいずれもある事実の因果について客観的に述べている文である。中国語の代表的な原因・理由を表す“因为”“由于”と結果を表す“所以”“因此”のいずれも使用できる。これらの文において、従属節と主節の接続表現の使用は以下の4つの表現類型が含まれている。

- |                |                    |
|----------------|--------------------|
| a. 「G P, Q」型   | (原因節のみ使用)          |
| b. 「P, G Q」型   | (結果節のみ使用)          |
| c. 「G P, G Q」型 | (原因節と結果節ともに使用)     |
| d. 「P, Q」型     | (原因節と結果節の何れも使用しない) |

「a」と「b」のように、接続表現が原因節または結果節の一方のみに置かれる場合は、接続表現のある節に多少重点が置かれているように思われる。「c」のように、原因節と主節ともに接続表現が置かれている場合は前後節の関係は一層はっきりとする。「d」の場合は、接続表現が省略されているが、原因節と結果節の関係は文面から十分読み取ることができる。というのは、「事態原因を表す文」での原因と結果の関係は直接的に結びかかっているからである。[10] ~ [14] の用例は、いずれも事実となっている原因と結果状態について述べている文であり、主節には意志行為が見られないため、「静的因果関係」だと言える。このような「静的因果関係」の文には、因果関係を表すと同時に、継起関係も表す結果節で使用される接続表現の“于是”と、前後節の意味関係を示さず、前後節の時間的な

継起関係を表す機能を持ち、結果節で用いられる“就／便”を使用すると、自然さを失ってしまう。たとえば、[11] の場合は、接続表現を使用しなくても、前後節の表現内容から意味関係が読み取れる上、自然な中国語になっているが、結果節の前にそれぞれ“于是”と“就／便”を入れると、極めて座りの悪い中国語になってしまう。

[11'] \* 这是睡午觉的功夫，于是场院里外都不见人影。

[11"] \* 这是睡午觉的功夫，就／便场院里外都不见人影。

しかし、結果節に説明的なニュアンスを帯びる結果を表す“所以”を使用すると、自然さを少しも損なわない。

[11'"] \* 这是睡午觉的功夫，所以场院里外都不见人影。

このような文では、前後節の関係は「静的な因果関係」になっているため、因果関係を表すと同時に継起関係も表す“于是”と、時間の前後継起を表す機能を持つ“就／便”の使用条件を満たしていないのである。

以上、事態原因文における両言語の接続表現の使用について検討してきた。分析結果としては、「事態原因を表す文」において、日本語の接続表現の「から、ので、ため(に)、て」の使用は制約を受けにくく、いずれも用いることができる。一方、中国語の接続表現の使用は制約を受ける場合がある。中でも継起関係を伴う因果関係を表す“于是”と、時間の前後の継起関係を表す“就／便”の使用が許容されない。結果をまとめると【表14】のようになる。

【表14】「事態原因を表す文」の特徴

言語	特徴	接続表現		
		表現の種類	使用可否	備考
日本語	<ul style="list-style-type: none"> <li>原因と結果の関係は直接的。</li> <li>モダリティ形式と共起しない。</li> <li>客観的に原因と結果について述べる。</li> <li>「単なる原因・理由を表す文」でもっとも典型的。</li> </ul>	から	○	
		ので	○	
		ため	○	
		て	○	
中国語	<ul style="list-style-type: none"> <li>原因と結果の関係は直接的。</li> <li>事実の因果について客観的に述べる。</li> <li>「QP, Q」型、「P, GQ」型、「GP, GQ」型、「P, Q」の4通りの表現類型がある。</li> <li>「静的因果関係」を表す。</li> </ul>	因为	○	
		由于	○	
		所以	○	
		因此	○	
		于是	×	
		就／便	×	
(接続表現なし)	○			

注：○は適切なもの、×は使用できないものを示す。×は表現として適切ではないものを示す。

### 3.2.2 ネガティブな心理的要素を伴う行為の理由文

本研究では、従属節の事態によって、主節において心理的に抵抗のある行動が行われる因果関係を表す複文を、ネガティブな心理的要素を伴う行為の理由文と名付けている。この種類の文は、従属節に状態性述語が使用される傾向があり、従属節のある状態によって、主節で不本意な行動が行われるのが特徴である。

- (15) 仕方がないから部屋の中へ這入って汗をかいて我慢していた。 『坊』
- (16) 君は惰性で急廻転が出来ないからやはりやむを得ず前進してくる。 『吾』
- (17) 仕方がないのでも他の始末に取りかかった。 『黒』
- (18) 僕は彼女が来るまでビールを飲んで待っているつもりだったのだが店が混みはじめたので仕方なく料理を注文し、一人で食べた。 『ノル』
- (19) 「…脇が腫れ上がったため、寝ているほかに仕方がない。…」 『黒』
- (20) 「へえ」と細君は挨拶のしようもないと見えて簡単な答えをする。 『吾』
- (21) パンツが濡れているので裸のまま畦道を通りぬけ、古市の禪街を横切って仮寓に帰って来た。 『黒』

(15)～(21)の「から・ので・ため・て」文は、従属節ですべて状態性述語が使用されており、従属節のある状態によって、主節で意志的な動作が行われるといった構文になっている。これらの文においては、従属節ないし主節に「仕方がない」「やむを得ず」「しようもない」のようなネガティブな心理的要素を文面に直接出すものと、動作主の抵抗のある心理的な動きを明示せず、従属節と主節の内容より読み取るものの2種類が含まれている。(15)～(20)は前者であり、(21)は後者である。

(21)の場合は、従属節の「パンツが濡れている」という状態によって、主節の「裸のまま畦道を通りぬけ、古市の禪街を横切って仮寓に帰って来た」という行為が導かれている。動作主の心理的な動きを明示する表現は使用されていないが、従属節と主節の表現内容より、主節における動作主の行為は、動作主にとってはまったく抵抗のない行動ではなく、そうせざるを得ない気持ちが含まれていることが窺える。つまり、「裸のまま畦道を通りぬけ、古市の禪街を横切って仮寓に帰って来た」という行動を取るに至ったのは、「パンツが濡れているので」→「仕方ないから」という「事態原因→心理的な動き」といったプロ



セスを経て、「裸のまま畦道を通りぬけ、古市の禪街を横切って仮寓に帰って来た」という意志行為が行われたということである。このように、ネガティブな心理的要素が文面で明示されなくても、前後節の表現内容を通して、ネガティブな心理的要素を伴っている意味合いも読み取れる。

一方、中国語にもこのような「ネガティブな心理的要素を伴う行為の理由文」が見られる。中国語の場合には、因果関係を表す副詞の“只好（せざるを得ない）”，“只得（せざるを得ない）”などの心理的色彩を帯びる副詞を使用する文が多く観察される。これらは、原因を表す“因为”“由于”と呼応させて使用する場合もあるが、単独に使用する場合が多い。

- [22] (四)他失去了工作和家庭，(結)只好四处流浪。 《当》  
彼は仕事と家庭を失ったため、あちこち流浪して歩いている。 (拙訳)
- [23] (四)由于下身溃烂，不能行路，(結)只好爬着前进。 《当》  
下半身が崩れただれて、歩くことができないので、這って前進するしかない。(拙訳)
- [24] 他想学钢琴，(四)家境不允許，(結)只得拉起手风琴。 《作家》  
彼はピアノを習いたかったが、経済的に許されなかったので、アコーディオンを弾き始めた。(拙訳)
- [25] (四)阿Q忍不下去了，(結)他只好到老主顾的家里去探问， 『呐』  
阿Qは辛抱できなくなつて、やむなくお顧客の家へ注文とりに回った。 《呐》
- [26] 为医疗器械的不合格，陆文婷和大夫们不知提过多少次意见。然而，这些不合格的次品仍然经常出现在托盘里。(四)没办法，(結)陆文婷只好挑选使用。 《北京》  
医療機器の不良品については、陸文婷医師がどれほど意見を述べたか知れない。それでも相変わらずこんな不良品が出てくる。仕方がないので陸文婷はその中から使用できるものを選び出す。 『北京』
- [27] 直到比赛开始，也没见王一生的影子。问了他们分场来的人，都说很久没见王一生了。大家有些慌，(四)又没办法，(結)只好去看脚卵赛篮球。 《棋王》  
いよいよ大会が始まったが、王一生はついに姿をあらわさなかった。彼の分場からきた者たちにたずねても、彼を久しく見かけていないということだった。みなはいささか不安になってきたが、どうしようもないので、のっぽのバスケットの試合を見に行った。 『チャン』

[22]～[27]では、因果関係を表す副詞の“只好”，“只得”が用いられている。“只好”，“只得”の意味機能に関しては、王起瀾他(1989)<sup>9)</sup>は「分句を接続し、因果関係を表す。つまり前分句は原因を表し、後分句は“只得”を用いて、前の原因のため、他の選択の余地がなく、そうせざるを得ないことを表す。“只好”も分句を接続し、因果関係を表す。用法は“…只得…”と同様である。(拙訳)」と述べている。

王(1989)によれば、“只好”，“只得”自身に「やむを得ず」という意味合いが含まれていることがわかる。上掲用例では主節に“只好”，“只得”を使用することによって、いずれも、主節で行われた行為は“不得已(やむなく)”という心理的に抵抗のある行為となっている。結果節にある“只好”，“只得”は論理性が強く、説明的な接続表現の“所以”、“因此”などと互換できるが、そうすると「やむを得ない」という心理的な色彩を帯びることが伝わってこない。また、この種の文において、中国語も接続表現の使用が必須とされる。中国語は主節で意志的な行為が行われる場合、接続表現を用いないと、従属節の状態と主節の行動が関係し合っているものだと捉えにくくなり、従属節と主節のつながりが非常に悪くなる。中国語では、主節が意志的な行為である場合、接続表現の使用と不使用はそれほど自由ではないかに見受けられる。この点に関しては、次に「時間的な継起関係を伴う行為の理由文」について分析する際、さらに検証したい。

ここまでの分析を通して、ネガティブな心理的要素を伴う行為の理由文において、日本語は「から」「ので」「ため(に)」「て」のいずれの表現を使用しても、前後節の真の意味合いが伝えられるが、中国語では、前後節における真の意味合いを伝えようとする、そういったニュアンスを表現できる接続表現の使用が必要とされるということがわかる。したがって、主節で動作主にとって心理的に抵抗のある行為が行われ、動作主の「やむを得ない」心理的色彩の存在を表そうとすると、“只好”，“只得”などのような「心理的色彩」を帯びるものを用いなければならない。

以上、ネガティブな心理的要素を伴う行為の理由文における両言語の接続表現の使用について検討してきた。分析結果は【表 15】のようにまとめられる。

【表15】「ネガティブな心理的要素を伴う行為の理由文」の特徴

言語	特徴	接続表現		
		表現の種類	使用可否	備考
日本語	・従属節のある状態により主節で不本意な行動が行われる。 ・従属節に状態述語が使用される傾向あり。 ・心理的要素を直接出すものと、内容に包含するものがある。	から	○	
		ので	○	
		ため	○	
		て	○	
中国語	・従属節のある状態により主節で不本意な行動が行われる。 ・「心理的色彩」を帯びる副詞(只好、只得など)を用い、これらの単独使用が多い。 ・因为、由于などの接続表現は単独使用できない。	只好	◎	
		只得	◎	
		因为	○	只好、只得と呼応して使用。
		由于	○	只好、只得と呼応して使用。
		(接続表現なし)	×	主節が行為であるため、接続表現は使用不可欠。

注:◎はもっとも適切なもの、○は適切なもの、×は表現として適切ではないものを示す。

### 3.2.3 時間的な継起関係を伴う行為の理由文

継起関係を伴う行為の理由文とは、3.2.2の「ネガティブな心理的要素を伴う行為の理由文」と同じく、主節で意志的な行為が行われるが、動作主にとって心理的に抵抗のある行為ではないものことである。この種類の特徴としては、前後節の間に時間的な継起関係が含まれていることである。また、従属節では状態性述語が多用されているが、中では心理的な変化を表す表現の使用が目立つ。

- (28) 喜助は、遠い雪道を歩いて、わざわざ墓参に来てくれたのだと思うと、茶なりと出さねばなるまいと思っ<sup>て</sup>、この女を母屋に案内した。 『越』
- (29) やれやれと思っ<sup>て</sup>、僕は背中荷物を石の欄干に凭せかけて一と休みした。 『黒』
- (30) これは推参な奴だ。人の運動の妨をする、ことにどこの鳥だか籍もない分在で、人の塀へとまるという法があるもんかと思っ<sup>た</sup>から、通るんだおい除きたまえと声をかけた。 『吾』
- (31) 鈴木君はもう大概訪問の意を果したと思っ<sup>た</sup>から、それじゃ失敬ちと来たまえと帰って行く。 『吾』
- (32) 柱だと分っ<sup>た</sup>ので夢中で抱きついた。 『黒』
- (33) 僕は咽がひりひり痛む<sup>ので</sup>、リュックサックから瓶を取出して水をラッパ飲みにした。 『黒』
- (34) 面倒臭い<sup>から</sup>、さっさと学校へ帰って来た。 『坊』

(35) 吾輩は少々物凄くなったから早々窓から飛び下りて家に帰る。 『吾』

(28)～(31)はいずれの従属節にも「思う」が使用され、心理的な動きによって、主節の行為が引き起こされている。(32)は瞬間的な心理的な変化を表す動詞の「分かった」が使用されており、何か把握し、そして行動する。(33)の従属節に状態動詞の「痛む」が使用されているが、「咽がひりひり痛む」と感じ、そして「リュックサックから瓶を取り出して水をラップ飲みにした」という動作が行われたと理解できる。(34)の従属節には「思う」が文面に出されていないが、実際に「面倒臭いと思ったから」、主節の行為が行われたと考えられる。(35)は従属節に「少々物凄くなった」という状況を感じ、そして、主節で「早々窓から飛び下りて家に帰る」という行為が行われたといえる。

これらの文は、動作主は従属節で何か「思って」「感じて」「察して」「把握して」、主節ですぐある行為が行われるため、従属節と主節の意味関係は継起関係を伴う因果関係になっている。たとえば、(28)の場合は、「茶なりと出さねばなるまいと思った。それで、この女を母屋に案内した」という意味関係だけではなく、「茶なりと出さねばなるまいと思った。そして、この女を母屋に案内した」といった意味関係も読み取れる。つまり、このような文は因果関係だけではなく、継起関係も含まれている。したがって、本研究では、このような継起関係を伴う因果関係の文を「継起関係を伴う行為の理由文」と呼ぶことにする。

上掲用例には「から・ので・て」が使用されている用例があるが、「ため(に)」文は含まれていない。とはいえ、「ため」はこの種の文で使用できないわけではなく、「ため」の使用条件を整えると、使用できる場合もある。例えば、(35)の「から」を「ため」に置換すると、自然な文になりうる。

(35') 吾輩は少々物凄くなったため早々窓から飛び下りて家に帰る。

(35)の従属節の述語は状態の変化を表す述語であり、変化した状態は持続性を持つため、「ため」の使用が許容される。従属節の述語が状態述語であっても、瞬間的な変化を表すものであれば、「ため」がこの種の文に適さないと考えられる。例えば、

(32') \* 柱だと分ったため夢中で抱きついた。

一方、中国語では「継起関係を伴う行為の理由文」も観察されるが、用いる接続表現は、3.2.1 と 3.2.2 で述べた接続表現の機能とは異なるものである。

[36] “剑云，你近来还在王家教书吗？怎么好多天不看见你来？身体还好罢？”觉新算好了账，<sup>(因)</sup>忽然注意到剑云有一点局促不安的样子，<sup>(結)</sup>便关心地问道。 《家》

「劍雲、まだ王さんとこの家庭教師をやってるの？しばらく見えなかったね。からだの具合はもういいの？」覚新は帳簿の計算を終えて、ふと劍雲の小さくなっている様子に気がついてそうたずねた。 『家』

[37] 有时他几乎灰心了，可是<sup>(因)</sup>又觉得仿佛再走一步就能找到，<sup>(結)</sup>于是又咬着牙坚持下去。

《轮椅》

あきらめたくなってきたが、あと一歩で見つかるような気もして、また歩き続けた。

『車』

[38] 燕宁笑自己的胆怯，<sup>(因)</sup>她疑心自己刚才听错了，<sup>(結)</sup>于是，又关上窗子，躺下去拉灭了电灯。

《轮椅》

燕寧は自分の臆病さを笑い、さっきは雨の音を聞き違えたのかと思って窓を閉め、ベッドに戻って明かりを消した。 『車』

[39] <sup>(因)</sup>我不愿让爸爸发现我醒了，<sup>(結)</sup>于是又赶忙闭上眼睛，

目を覚ましたのを知られたくないと思って、私はあわてて目を閉じた。 『車』

[40] <sup>(因)</sup>觉新马上知道觉慧处在什么样的境地里面，<sup>(結)</sup>便平静地走到祖父面前去。 《家》

覚新は覚慧がどんな立場に立っているのかを直感して、静かに祖父の前に立った。

『家』

[41] <sup>(因)</sup>鸣凤看见他不抬头，<sup>(結)</sup>便走到桌子旁边胆怯地但也温柔地叫了一声：“三少爷。” 《家》

鳴鳳は彼が頭を上げないのを見て、デスクのそばへ歩み寄り、おずおずと、しかしやさしい声で「三少爺」と呼んだ。 『家』

[42] 她说到这里，<sup>(因)</sup>觉得有点失言，教她的佣人听了不舒服，<sup>(結)</sup>就改过一句说话： 《缀》

其処まで言うと、いささか失言のような気がし、傭人たちが聴いて気をわるくすると思ったので、言葉を改めて言った。 『巢』

[36] ～ [42] の結果節には、因果関係を表すと同時に継起関係も表す表現の“于是”と、因果関係を表さないが接続機能を持ち、前後節の時間的な継起関係を表す“就”“便”

が使用されている。中国語では、これらの表現は主節で意志的な行為が行われる場合に、用いられる傾向がある。“于是”が使用されている文では従属節と主節の因果関係と継起関係が“于是”によって明示されているが、接続機能のみを持つ“就”“便”の場合は前後節の継起関係は表しているが、因果関係を表す機能を持っておらず、前後節の因果関係は内容より読み取る。“于是”“就”“便”いずれもそれらの表現自身に継起関係を表す機能を持つため、これらが使用される場合、前後節の関係は時間的要素が含まれる「動的因果関係」となる。

“就”“便”“于是”といった表現を論理性の強い結果を表す“所以”、“因此”と互換できるが、意味合いには違いが生じる。中国語では、“所以”、“因此”の使用は制約を受けにくく、「静的因果関係」を表す文だけではなく、「動的因果関係」を表す文にも使用できる。ただし、上掲用例の場合は、説明的かつ論理的な“所以”、“因此”に置き換えると、前後節の因果関係の意味合いは強められ、継起関係の意味合いは非常に薄くなる。場合によって、理屈っぽくなるものもある。例えば、

[38'] 燕宁笑自己的胆怯，她疑心自己刚才听错了，所以，又关上窗子，躺下去拉灭了电灯。  
燕寧は自分の臆病さを笑い、さっきは雨の音を聞き違えたのかと思った。だから、窓を閉め、ベッドに戻って明かりを消した。

[38'] は、“所以”を使用することによって、従属節と主節の間に説明的な意味合いが強くなり、「だから」の意味が前面に出され、「そして」の意味が極めて薄くなっている。

このように、中国語の因果関係のみを表す接続表現は、日本語の「ので、から」などとは異なり、論理性が強く、説明的な意味合いも含まれているため、時間的な継起関係を伴う行為の理由文での使用が許容されるが、前後節の真の意味関係を表しきれないと言える。

“就”“便”は結果を表す接続表現の“所以”、“因此”と互換できるが、原因・理由を表す接続表現の“因为”“由于”と互換すると、前後節のつながりが悪くなり、文として成立できない。たとえば、

[40'] \* 因为/由于觉新马上知道觉慧处在什么样的境地里面，平静地走到祖父面前去。

ある行為が主節で行われる場合、従属節とそれによって引き起こされた主節の行為の理

由との間に関係付ける接続表現の使用が必要とされる。[40']の主節に“就/便”を使用すると、自然な文になる。

[40"] 因为/由于 觉新马上知道觉慧处在什么样的境地里面, 就/便 平静地走到祖父面前去。

中国語の因果関係を表す複文では、接続表現を用いず、いわゆる「意合複文」になっているものが多く見られるが、主節に意志的な行為が行われる場合は、接続表現を用いなければ、前後節のつながりが悪くなり、前後節の関係は従属節と主節との関係だと判断しにくい。ここまでの分析を見ると、従属節が主節のある行動の理由になっており、前後節には時間的な関係も含まれている場合は、接続表現の使用が必須であり、かつ主節には接続表現が置かれなければならないということがわかる。

以上、継起関係を伴う行為の理由文における両言語の接続表現の使用について検討してきた。分析結果をまとめると【表 16】のようになる。

【表16】「継起関係を伴う行為の理由文」の特徴

言語	特徴	接続表現		
		表現の種類	使用可否	備考
日本語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・従属節のある状態により主節で意志的な行為が行われる。</li> <li>・前後節の間に時間的な継起関係が含まれている。</li> <li>・従属節では状態述語が多用され、心理的な変化を表す表現の使用が目立つ。</li> </ul>	から	○	
		ので	○	
		ため	△	従属節が持続性のない状態では使用不可。
		て	◎	接続表現として最適。
中国語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主節で意志的な行為が行われる場合、“于是”“就”“便”が用いられる傾向がある。</li> <li>・上記の接続表現は継起関係を表す機能があるため、前後の関係は時間的要素を含む「動的因果関係」となる。</li> <li>・従属節が主節の行為の理由となっており、継起関係もある場合は、接続表現の使用が必須で、接続表現は主節に置く必要がある。</li> </ul>	因为	○	“就・便”と一緒に用いられる。
		由于	○	“就・便”と一緒に用いられる。
		所以	△	使用可だが継起性が弱まる。
		因此	△	使用可だが継起性が弱まる。
		于是	◎	因果関係と継起関係を表す。
		就/便	◎	継起関係を表し、因果関係は内容から読取
(接続表現なし)	×	接続表現は使用不可。		

注: ◎はもっとも適切なもの、○は適切なもの、△は使用可だが、真の意味関係は伝わらない、×は表現として適切ではないものを示す。

### 3.2.4 自然現象変化と状態変化の原因文

日本語では、自然現象の変化または状態変化について描写する際に、従属節の自然現象または状態が、主節のある自然現象の発生または状態の変化の原因となり、前後節の意味関係は自然現象の変化または状態変化の因果関係になっている。日本語は、自然に変化していき、形成されるものについて描く際に、なぜそのような変化が生じたかという原因について、原因を明示するのが特徴的である。一方、中国語は、生じた原因を示すより、描

写手法を重視する傾向が観察される。このような傾向は日本語の原文と中国語の対訳文においては、既に反映されている。以下、日本語の描写文とその中国語対訳について見てみる。

- (43) 天の河はその山波の線で切れるところに裾をひらき、また逆にそこから花やかな大きさで天へひろがってゆくようだった<sup>から</sup>、山はなお暗く沈んでいた。『雪』
- (43a) 银河向那山脉尽头伸展它的下端，再返过来，从那儿以壮阔的气势向太空扩展开去。山峦更加深沉了。《雪①》
- (43b) 银河向那山脉尽头伸张，再返过来从那儿迅速地向太空远处扩展开去。山峦更加深沉了。《雪②》
- (43c) 银河在峰峦起伏的尽头，展开她的裙裾，反过来，似乎又向天空灿穿四射。山容益发显得黑沉沉的。《雪③》
- (44) その杉は岩にうしろ手を突いて胸まで反らないと目の届かぬ高さ、しかも実に一直に幹が立ち並び、暗い葉が空をふさいでいる<sup>ので</sup>、しいんと静けさが鳴っていた。『雪』
- (44a) 杉树很高，要是不仰着胸背着手撑住岩石，简直看不到树梢。而且树干都排成一条线，笔直地耸立着，深绿色的叶子遮住了天空，显得深沉而静谧。《雪①》
- (44b) 杉树亭亭如盖，不把双手撑着背后的岩石，向后仰着身子，是望不见树梢的。而且树干挺拔，暗绿的叶子遮蔽了苍穹，四周显得深沉而静谧。《雪②》
- (44c) 杉树长得很高，非要把手放在背后，撑在石头上，仰起上半身才能看到树梢。一株株的杉树，排成一行行的，树叶阴森，遮蔽天空，周围渺无声息。《雪③》
- (45) 窓の外に静かな海があり、既に高く昇った日に照され<sup>て</sup>、岬は蔭を失っていた。『野』  
窗外是平静的大海，在高高地挂在空中的阳光的照射下，海角的阴影已经不见了。《野》
- (46) 太陽が西の山の肩に沈もうとし<sup>て</sup>、虹色の光の縞が水面に流れていた。『青』  
太阳已快下山，彩虹的倒影在湖面漂荡。《春》
- (47) 西日は池水の反射を、各層の庇の裏側にゆらめかせていた。まわりの明るさに比して、この庇の裏側の反射があまり眩ゆく鮮明な<sup>ので</sup>、遠近法を誇張した絵のように、金閣は威丈高に、少しのけぞっているような感じを与えた。『金』  
池水把夕照反射在金阁各层檐端的里侧，形成飘忽不定的澹影。与周围的明亮相比，反射到檐满里侧的波光更加鲜明耀眼。雄踞高耸的金阁简直就象一幅夸张了的透视图，挟着一种宏伟的气势。《金》



- (48) 下草がぼうぼうと長け<sup>て</sup>、林の中はうす暗かった。 『氷』  
乱草繁茂，林中幽暗。 《冰》
- (49) 山峡は日陰となるのが早く、もう寒々と夕暮色が垂れていた。そのほの暗さの<sup>ため</sup>  
<sup>に</sup>、まだ西日が雪に照る遠くの山々はすうっと近づいて来たようであった。 『雪』  
山沟天黑得早，黄昏已经冷瑟瑟地降临了。暮色苍茫，从那还在夕晖晚照下覆盖着皑皑  
白雪的远方群山那边，悄悄地迅速迫近了。 《雪①》
- (50) 低い屋根の連なりの彼方に、叡山の山壁の翳りは、その山壁の部分だけ、山腹の春め  
いた色の濃淡が、暗い引きしまった藍に埋もれている<sup>ので</sup>、そこだけが際立って近  
く鮮明に見えていた。 『金』  
在栉比鳞次的低矮屋脊那边，睿山走势逶迤，山褶皱处形成一道道绿翳。暗锁的春意实已  
十分耀眼了。 《金》

(43)～(50)の日本語原文は「から」「ので」「て」「ため(に)」のいずれかが使用されている。描写文であるため、言うまでもなく客観的に物事の原因・理由を示す「て」と「ため」の使用が許容される。

一方、中国語訳文においては、いずれも従属節と主節の因果関係を明示する接続表現が使用されていない。周囲の風景または状態について描写する場合、節と節の関係は因果関係というより、並列関係と言ったほうがより適切である。中国語の接続表現は論理的かつ説明的なものが多いので、使用すると、描写というよりそうなる状態の原因に関する説明的な意味合いが増える。例えば、(44a)の主節に接続表現を置くと、描写性が損なわれてしまう。

- (44a) 杉树很高，要是不仰着胸背着手撑住岩石，简直看不到树梢。而且树干都排成一条线，  
笔直地耸立着，深绿色的叶子遮住了天空，<sup>所以</sup>显得深沉而静谧。

(44a)の結果節に“所以”を用いることによって、主節の「显得深沉而静谧」という状態の変化の結果について説明的なニュアンスが強くなり、文全体の描写性が薄くなっている。実際に、描写文において、多くの場合は因果関係を表す接続表現を使用すると、文の自然さが損なわれてしまう。中国語の因果関係を表す接続表現は、論理性が強く、日本語の「から、ので、ため、て」のように、描写性に影響を及ぼさない機能を持っていないため、自

然描写文での使用は望ましくないとと言える。また、中国語の自然描写文は、状態の変化の原因・理由を示すことより、表現手法が重視されるようである。眼前の自然現象について描写する際には、リアリティを求め、真に迫るような効果を生み出すのが特徴的である。

また、相対的に静止している状態を描写する場合、複文内の関係は並列関係になるのが一般的である。この点について、趙恩芳（1998）<sup>10</sup> は次のように述べている。

有些复句，所表示的是立体形象的各个方面，各分句和起来成为一个完整的画面。虽然所描写的各个方面中，也有的是动态描述，但各方面的情况是同时存在的，因此，各方面相对而言又是静止的。这类复句内容上的共时性，反应在复句中便是各分句之间的并列关系。（一部の複文は各方面における立体的な状態を表している。節と節を組み合わせて、ひとつの整った画面になる。描写された各方面には、動的描写もあるが、各方面の状態が同時に存在しているのであり、それは相対的に言えば、静止しているのである。この種類の複文の内容的な共時性が、複文の中で反映されると、節と節の関係は並列関係となる。）

趙恩芳（1998）によると、日本語の因果関係を表す複文は中国語に訳される際に、因果関係を表す接続表現を使用せず、並列複文として訳される傾向が強いというが、そうした理由が明確になったであろう。実際に、接続表現を使用しない方が自然な中国語になるだけでなく、使用しないからこそ、より適切に原文の描写性を伝えることができるのである

中国語の描写文の場合、場面と場面間の関係は、ひとつの場面によって新たな場面が引き起こされるという前後の関係ではなく、同時に存在していると考えるのが一般的であり、並列的に展開していくものである。

このように、中国語の自然描写文は因果関係を表す複文の枠組みに含まれていないことも考えられるので、並列複文だと考えるべきであろう。

自然現象の変化と状態変化の原因・理由文に関する分析結果をまとめると、【表 17】のように表示できる。

【表17】「自然現象変化と状態変化の原因・理由文」の特徴

言語	特徴	接続表現		
		表現の種類	使用可否	備考
日本語	・自然描写においても原因を明示する。 ・日本語の接続表現は描写性に影響を与えない機能を持つ。	から	○	
		ので	○	
		ため	○	
		て	○	
中国語	・原因より描写手法を重視する傾向がある。 ・中国語の接続表現は論理性が強く、自然描写文では一般に使用されない。 ・中国語の描写文では場面と場面が並列的に展開しているのが特徴。(並列複文)	(接続表現なし)	○	

注：◎はもっとも適切なもの、○は適切なもの、×は表現として適切ではないものを示す。

### 3.2.5 感情表明の原因・理由文

感情表明の原因・理由文は、主節で話者の感情変化を表し、従属節で感情の変化の理由を表している。なぜそのような感情の変化が生じたかといった理由になっている。この種の文は、「て」がよりふさわしい場合もあれば、「て」より「から・ので」がよりふさわしい場合もある。また、「て」文、「から」文、「ので」文のいずれも自然な文になる場合もある。まず、主節における話者の感情を表す文についてみる。なお、この種の文は書面語として多く使われる「ため(に)」はそぐわないので、ここでは「ため(に)」文を検討対象から外すことにする。

(51) 会え<sup>て</sup>うれしい。

(51) の「て」は主節で生じた感情の変化の原因を表していると同時に、そうした感情の向けられる「対象」の意味も表している。つまり、「会えたので、うれしい」という意味と「会えたことが(わたしには)うれしい」のふたつの意味を示している。これを「から・ので」に置き換えることができるが、意味的には違ってくる。

(51') 会えた<sup>ので</sup>、うれしい。

(51'') 会えた<sup>から</sup>、うれしい。

(51') と (51'') は(51)とは違って、原因の意味しか表せない。つまり、「会えたことが(わたしには)うれしい」という意味が含まれていないのである。「て」は主語と述語の制限を受けやすい傾向があるため、次のような文は、「て」より、「から」と「ので」のほうがより自然である。

(52) あなたはよく嘘をつくから嫌いだ。

(52)の従属節の主語は聞き手になっており、主節の主語は話し手自身になっている。つまり、従属節の聞き手の「嘘をつく」という行為が主節の話し手自身の感情表明の原因になっている。(52)を「ので」と置き換えられるが、「て」と置き換えると、座りが悪くなる。

(52') あなたはよく嘘をつくので嫌いだ。

(52'') \* あなたはよく嘘をついて嫌いだ。

(52)の前後節の主語は異主語であり、それぞれ有情物になっている。従属節の「嘘をつく」は従属節の行為者の意志的な要素が含まれており、主節の「嫌い」は話し手自身の感情表明であるため、「て」の使用条件を満たしていない。というのは、原因・理由を表す「て」は、人間の意志のコントロールが及ばないところで自然成立した因果関係しか表せないからである。

以上の分析によって、感情表明の原因・理由文においては、主節で生じた感情の変化の原因を表していると同時に、そうした感情の向けられる「対象」の意味も表しているものと、主節で生じた感情の変化の原因のみを表しているものの2種類があることがわかる。

日本語の「感情表明の原因・理由文」に対して、中国語の因果関係を表す複文には、それと同等の意味関係を持つものがなく、因果関係を表す複文だと認めがたい場合がある。ここで、例(51)(52)のようなものを中国語で表現すると、以下ようになる。

[53] 见到你很高兴！

会えてうれしい。

[54] 你净说谎，讨厌

あなたは嘘をつくから、嫌いだ。

[53] は自然な文になっているが、従属節の“见到你”が主節の“很高兴”という感情を引き起こす原因となっているとは認めにくい。相手に「会えたので、うれしい」という因果関係の意味合いが読み取れず、相手に「会えたことが（わたしには）うれしい」という意味合いのみがうかがえる。感情の変化の原因・理由を示すより、発話時の心情をストレートに聞き手に伝えることのみ重視されている。この種の文において、中国語と日本語はそれぞれ重要視するところが異なっている。日本語は原因と、それによって引き起こされた感情の表明の両方を表現しようとするのに対して、中国語は感情の表明のみを表現しようとしているように思われる。

[53]の文には、因果関係を表す接続表現が用いられにくく、相手との会話の流れの中では、“见到了你，很高兴！”といったような言い方をするのが一般的である。接続表現を使用しようとするならば、一方的な会話ではなく、聞き手とのやりとりの中で実現できる。

A：你为什么那么高兴？

〔どうしてそんなにうれしいの〕

B：因为见到了你，（所以很高兴）。

〔あなたに会えたから、（うれしいです）〕

この場合因果関係がもちろん成立するが、Aの質問に対して、前半だけを言うのが一般的である。しかし、接続表現を用いることによって、文の性質が相手への感情の表明の意味合いを失い、単なる感情変化の原因・理由について述べている意味合いが前面に出されている。中国語において、この種の文は、因果関係を表す接続表現を使用すると「あなたに会えた（から／ので）、うれしいです」に相当する意味合いを表現できるが、因果関係を表す文として成立させる前提条件が必要である。つまり、この種の文に接続表現が使用される場合、一方的な話の中では使用できず、聞き手からの問いかけを受けて答えるときのみ使用できるのである。

用例[54]の文も、[53]と同じく、自然な会話の流れの中では、「你净撒谎，讨厌！」というように、因果関係を表す成分を省き、感情をストレートに押し出す表現方法が自然である。接続表現を使用しても、非文にならないが、文の成立には前提が必要である。

A：你为什么讨厌我？

「どうして私のことがきらいだというのですか」

B： **因为**你净说谎，

「あなたは嘘をつくから（きらい）」

このように、「どうして私のことがきらいというのですか」と問われない限り、因果関係を表す接続表現を使用しないほうが一般的かつ自然な表現方法である。因果関係を表す接続表現を用いると、日本語の「から・ので」によって表現されている意味合いとは異なり、感情の変化の原因を表明するニュアンスを帯びず、全文にわたって説明的な意味合いが強くなる。

以上、感情表明の原因・理由文についてみてきた。分析結果をまとめると【表18】のようになる。

【表18】「感情表明の原因・理由文」の特徴

言語	特徴	接続表現		
		表現の種類	使用可否	備考
日本語	<ul style="list-style-type: none"> <li>主節で話者の感情変化を表し、従属節でその理由を示す。</li> <li>場合により、使用される接続表現のふさわしさが異なる。</li> <li>書面語として多用される「ため」の使用はそぐわない。</li> <li>主節の感情変化の原因のみ表す場合と、同時に感情の向けられる「対象」の意味も表す場合の2種類がある。</li> </ul>	から	○	
		ので	○	
		ため	×	書面語に多用されるのでそぐわない。
		て	○	
中国語	<ul style="list-style-type: none"> <li>原因よりも感情の表明のみを表現しようとする。</li> <li>一方的な話のなかでは接続表現が使用できず、聞き手からの問いかけに答える場面で使用可となる。この場合、前文にわたって説明的な意味合いが強くなる。</li> </ul>	(接続表現なし)	○	
		(接続表現使用)	△	問いかけに答える場合のみ可。

注：◎はもっとも適切なもの、○は適切なもの、×は表現として適切ではないものを示す。

### 3.2.6 感情評価の原因・理由文

「感情評価の原因・理由文」では「感情表明の原因・理由文」との共通点があり、主節には形容詞あるいはナ形容詞が使用されるのが特徴である。ただし、使用された形容詞とナ形容詞の属性が違っている。「感情表明の原因・理由文」の主節には、感情を表す形容詞あるいはナ形容詞が使用されるのに対して、「感情評価の原因・理由文」の主節には、評価性を持つ形容詞あるいはナ形容詞が使用される。評価の対象は非情・有情物である。

(55) 毎日家事の手伝いを  $\left[ \begin{array}{l} \text{して} \\ \text{するので} \\ \text{するから} \end{array} \right]$  ありがたい

(56) 子供まで  $\left[ \begin{array}{l} \text{殺してしまって} \\ \text{殺してしまったので} \\ \text{殺してしまったから} \end{array} \right]$  残酷だ

(57) 自動車の中にトイレも  $\left[ \begin{array}{l} \text{ついていて} \\ \text{ついているので} \\ \text{ついているから} \end{array} \right]$  便利だ

これらの文の主節は話し手の聞き手あるいはものへの感情評価になっており、従属節はそのように評価する理由になっている。この種の文は、有情物への評価と非情物への評価のいずれもある。有情物への評価の場合は、話し手は当事者ではなく、当事者の外側に立って、当事者の行為を観察し、その行為について評価する。非情物への評価の場合は、自分の所有物、他者の所有物または自分・他者とまったく関係のないものの状態や性能などについて評価できる。他者あるいはものについて語り、前後節には意志的な要素が含まれていないので、「から・ので」文だけではなく、「て」文にもふさわしい。

中国語では、この種の文は、因果関係を表す複文とは認めにくい。ここで、例(55)(56)(57)と似通っている中国語の用例を挙げてみる。

[58] 小明每天都帮妈妈做家务，真勤快！

明君は毎日母の家事の手伝いをし $\square$ て、(するから、するので) ありがたい。

[59] 他连三岁的小孩都不放过，真残忍！

彼は三歳の子供まで殺してしまっ $\square$ て (殺してしまったので/殺してしまったから) 残忍だ。

[60] 现在的手机都有发短信和照相功能，方便极了！

いまの携帯電話はメールを送る機能と写真を取る機能が全部付いている $\square$ ので (から) 本当に便利だ。

[58]～[60]はいずれも接続表現が使用されておらず、自然な中国語となっている。しかし、このような他者のものについて評価する文には、評価の理由を示すと、中国語としての自然さが消え、「感情表明の原因・理由文」より、一層座りの悪い文になっている。

[58'] \* **因为**小明每天都帮妈妈做家务，真勤快！

[59'] \* **因为**他连三岁的小孩都不放过，真残忍！

[60'] \* **因为**现在的手机都有发短信和照相功能，方便极了！

[58] [59] の主節に、述語の前に程度副詞の“真”が使用され、“真+勤快”、“真+残忍”という「副詞+形容詞」の形になっており、[60] の主節に述語の“方便”の後ろに程度補語の“极了”が使用され、「形容詞+程度補語」という形になっている。述語の前或いは後ろに程度を表す表現が使用されることによって、話者の主観的な気持ちと強い感情が前面に出されている。中国語では、人またはものについて話者自体の強い感情を込めて評価する場合、そのように評価する理由については明示しないのが特徴であり、「感情評価の原因・理由文」とは言い難く、“感叹句（感嘆句）”の一種だと考えられる。“感叹句（感嘆句）”の特徴については、趙（1998）<sup>11)</sup>では次のように記述されている。

感叹句的语调是先升后降的，句末常用语气词“啊”。感叹句带有强烈的感情：有的表示赞扬赞颂，有的表示惊讶惊喜，有的表示伤心痛苦，有的表示愤怒呵斥，有的表示欢乐愉快，等等。感叹句表示感叹语气，句末都用叹号。

「感嘆文」は昇→降の語調であり、文末に語気詞の“啊”がよく用いられる。激しい感情を帯びている。中には、称賛を表すもの、驚喜を表すもの、悲痛な気持ちを表すもの、憤怒を表すもの、喜びを表すものなどがある。感嘆句は感嘆の語調を表すため、文末にはすべて感嘆符を使用する。

例としては、以下のようなものが挙げられている。（例文番号は本論文の用例の通し番号を合わせて表示する）

[61] 你是谁，这么放肆！

（おまえは誰だ、こんな無礼な！）

[62] 他一人对付几个带凶器的歹徒，真勇敢！



(彼は一人で何人も凶器を持つ悪者を懲らしめたから、勇敢だ。)

例[62]の訳文を見れば、日本語の「感情評価の原因・理由文」に相当することが分かる。つまり、中国語では、日本語の「感情評価の原因・理由文」と対応性を持つものは「因果関係」を表す複文ではなく、「感嘆文」である。このような傾向は日本語に対する中国語の訳文にも観察される。例えば、

- (63) 「…君は十年前と容子が少しも変わっていないからえらい」 『吾』  
 (63a) “…老兄和十年前一点都没变样，了不起！” 《我①》  
 (63b) “…你和十年前的劲头丝毫没变，真了不起！” 《我②》

(63)の原文は「から」が用いられているが、中国語訳文は接続表現が用いられていない。訳文の(63a)(63b)の文末に感嘆符が使用されており、正しく感嘆文になっている。

以上、感情評価の原因・理由文について検討してきた。結果をまとめると、【表 19】のように表示できる。

【表19】「感情評価の原因・理由文」の特徴

言語	特徴	接続表現		
		表現の種類	使用可否	備考
日本語	・主節は話し手の、聞き手またはものへの感情評価で、 そのように評価する理由を従属節で述べる。 ・有情物に対しては第三者的に評価し、非情物の場合は幅広く、そのものの状態や性能などについて評価できる。	から	○	
		ので	○	
		ため	×	書面語に多用されるのでそぐわない。
		て	○	
中国語	・中国語では評価の理由を明示しないのが特徴であり、 「因果関係」を表す複文ではなく、「感嘆文」となる。 ・程度副詞の“真”や程度補語の“极了”などが使用される。	(接続表現なし)	○	

注：◎はもっとも適切なもの、○は適切なもの、×は表現として適切ではないものを示す。

### 3.2.7 心理状態の変化を引き起こす原因・理由文

心理状態の変化を引き起こす理由文は、主節の心理状態の変化が従属節のある状態によって、引き起こされるものである。日本語では、この種の文は、主節には心理状態を表す表現が用いられ、「て」文になっているものが多いが、「ので・から・ため(に)」文も見られる。

(64) 帰るみちみち、登美子の首をしめた時の手のひらの感触が思い出され<sup>て</sup>、苦しんだ。

『青』

(65) 窓の外にはまだ雨が降っていた。その鬱陶しさが、母の言葉のうるささと一緒になっ

<sup>て</sup>、一層やりきれない気持になった。『青』

(66) 大王にしては少々言葉が卑しいと思ったが何しろその声の底に犬をも挫しぐべき力が

籠っている<sup>ので</sup>吾輩は少なからず恐れを抱いた。『越』

(67) 藪から伐った女竹の束を小舎までかついではこぶのに、喜助は村道を何ども歩かねばなら

なかったが、背がひくい<sup>ために</sup>、竹の先が地めんを這うのが恥かしかった。『越』

(64)～(67)には、従属節の出来事によって、主節のある心理状態の変化が引き起こされるという特徴を持っている。(64)の主節の「苦しんだ」という心理的な変化は「登美子の首をしめた時の手のひらの感触が思い出されて」という状態によって生じたものである。(65)の従属節も状態性述語が使用され、その状態によって主節の心理的な変化が引き起こされた。この種の文は従属節で状態表現が使用されているのが特徴であり、従属節にある状態が主節に何らかの働きかけをして、主節の心理的な変化を誘発したといったような意味関係が窺える。これは、「事態原因を表す文」などとは違う性質を持つものとも言える。上掲用例には「から」が使用されているものが含まれていないが、ニュアンス的な違いは抜きにして、いずれも「から」と置き換えることができる。

一方、中国語では、主節の心理状態の変化が従属節のある状態によって引き起こされる場合、その原因を示す接続表現としては誘発機能を持つ動詞の“使”、“使得”が使用される。

[68] <sup>(原)</sup>这感情是这样激越和有力，<sup>(译)</sup>竟<sup>使得</sup>她忘掉了刚才的紧张，『青春』

その感情は、あまりにも強く、はげしかった<sup>ので</sup>、いましがたの緊張を忘れさすほどだった。『青春』

[69] <sup>(原)</sup>罗大方的这句话，说得这样自然、这样亲切，<sup>(译)</sup>竟<sup>使得</sup>许宁长久地不能忘掉它。

『青春』

羅大方のそのことばは、とても自然で、心がこもっていた<sup>ので</sup>、許寧はそのあと、長いあいだ忘れることができなかつた。『青春』

[70] <sup>(原)</sup>树上的乌鸦哇哇啼叫，<sup>(译)</sup><sup>使</sup>她心情愈加烦乱。(自作)

木の上のカラスが騒がしく<sup>て</sup>、気分がいっそう苛立たしくなった。

[71] <sup>(原)</sup> 梦想终于得到了实现, <sup>(結)</sup> 这<sup>使</sup>他激动不已。 (自作)

夢がついに実現し<sup>て</sup>、彼は胸が詰まるようだった。

以上のような“使”構文では、主節の「心理的变化」はすべて従属節の影響を受けることによって生じたものである。“使”の意味機能について、呂叔湘(1999)<sup>12)</sup>は「“使得”は〔動詞〕であり、ある結果を引き起こす。“使”と同じ。」と示している。また、邢福义(2001)<sup>13)</sup>は「“客体”に視点を置いてみれば、“使”は“主体”の変化が、“客体”の影響を受け“客体”に動かされていることを表す。(中略) “主体”に視点を置いて見れば、“使”を用いて“主体”も完全に受身でなく、“主体”の変化には主観要素も機能していると感じられる。」と述べている。

以上からわかるように、主節の結果が、従属節のある影響を受けることによって引き起こされた場合、“使”または“使得”がその結果を引き起こす表現として用いられる。“使”は、原因・理由を表す“因为”“由于”と呼応させて使用される場合もより多く観察される。結果を表す“所以”“因此”などとも互換できるが、誘発的な意味合いが消える。誘発的な効果を生み出すために、“使”“使得”の使用が必要とされる。

以上、心理状態の変化を引き起こす原因・理由文について見てきた。分析結果をまとめると、【表 20】のように表示できる。

【表20】「心理状態の変化を引き起こす原因・理由文」の特徴

言語	特徴	接続表現		
		表現の種類	使用可否	備考
日本語	・主節に心理状態を表す表現が用いられ、「て」文になっているものが多い。	から	○	
		ので	○	
		ため	○	
		て	◎	
中国語	・主節の結果が、従属節のある影響を受けることによって引き起こされた場合、“使”または“使得”がその結果を引き起こす接続表現として用いられる。 “因为”、“由于”と 呼応して使用されることも多い。 ・“使”、“使得”は結果を表す“所以”“因此”などとも互換できるが、誘発的な意味合いが消える。	因为	○	“使”または“使得”と呼応して使用。
		由于	○	“使”または“使得”と呼応して使用。
		所以	△	誘発的な意味合いが消える。
		因此	△	誘発的な意味合いが消える。
		使	◎	
		使得	◎	
		(接続表現なし)	×	

注:◎はもっとも適切なもの、○は適切なもの、△は使用可だが、真の意味関係は伝わらない、×は表現として適切ではないもの

### 3.2.8 説明的な原因・理由文

ここで言う「説明的な原因・理由文」とは「結果⇒原因」という構造になっている説明性が強く、かつ原因節が際立てられている文のことである。日本語では、この種の文は「から」と「ため」が多く使用されるが、「て」「ので」は使用できない。

- (72) わたしが気づいたのは、女の子の声を聞いたからである。 『挽』
- (73) わたしが切符のことを思いついたのは、むろん昼間、アイリスの店の前で彼をみかけたからであった。 『挽』
- (74) 竹細工の村であった。竹ならばどんな種類でもあった。せまい土地にクロクなどのめずらしい小藪までもっていたのは、細工物に必要なだったためである。 『越』
- (75) 彼女が大学をやめたのは、学費を払えなかったからである。 (自作)
- (76) 多くの学校が廃止されたのは、子供が少なくなったためである。 (自作)

この種の文は、「から」と「ため」とは互換できるが、「ので」、「て」とは互換できない。前置されている主節で生じた事態または行われた行為の原因・理由を、後置されている従属節で説明的に示している。「…のは…から(ため)である」文は、文構造を変えることによって、説明性が強く、原因・理由も際立たれているのが特徴である。

一方、中国語の因果関係を表す複文においては、構文的かつ意味的にも「…のは…から(ため)である」文に相当する倒置構文が見られる。

- [77] (結) 七月初七之所以称为乞巧, (因) 是因为民间俗信这天牛郎织女相会于天河, 闺中女子就在晚上摆上瓜果, 朝天礼拜, 向女神乞巧。 《中日》
- 7月7日を「乞巧」と呼ぶのは、この日に、牽(けん)牛と織姫が天の川で会うと信じられ、未婚の娘たちが夜になると、果物などを備えて天に向かって礼拝し、女神に向かって巧みな技を乞(こ)うたからである。 『中日』
- [78] (結) 我们达到今天的历史地位, (因) 是由于中国共产党的领导。 《毛泽》
- 我々が今日のような歴史的地位に達せられたのは、中国共産党の指導があったからです。 『毛沢』
- [79] (結) 香港之所以能保持长期繁荣稳定, (因) 是因为它有内地的支持。 《当》

香港が長期の繁栄と安定を維持できるのは、内陸の支持を受けているから(ため)である。(拙訳)

- [80] (結)之所以写起小说, (因)就是因为对昆仑山的挚爱。《当》  
小説を書き始めたのは、昆仑山を誠実に愛しているから(ため)である。(拙訳)
- [81] (結)他之所以不愿公开病因, (因)是因为他不想看到自己的艺术因此而受到影响。《作家》  
彼が病因を公開したくないのは、それが自分の芸術に影響を及ぼすことを見たくないから(ため)である。(拙訳)

この種の文は日本語との等価性が非常に高い。[77] ~ [81] は「結果 ⇒ 原因」の“之所以Q, (就) 是因为P”と“Q, 是由于P”といった倒置構文になっており、意味上においては、原因・理由が際立てられ、かつ説明的な意味合いが強いものになっている。

中国語では、結果と原因の順序が倒置される場合、接続表現の使用は制約を受けるものが多い。日本語では「から」「ため」が使用されるのに対して、中国語は原因を表す代表的な表現の“因为”“由于”が使用される。原因を強調する効果を生み出すために、“因为”“由于”の前に焦点マーカの“是”或いは“就是”が用いられ、“是因为”“就是因为”“是由于”“就是由于”といった表現形式が使用されるのがほとんどである。また、これらの原因を表す接続表現が結果節にある“之所以”と呼応させて用いられるのが一般的である。中国語では、原因を表す表現より、結果を表す表現の種類が遥かに多いが、倒置文においては、“只所以”または“所以”のみ用いられ、“因此”“于是”“因而”などの使用が不可能である。ただし、主節に接続表現が使用されなくてもよい場合もある。例えば、[81]の場合は、主節の結果を表す表現の省略が可能である。

[81'] 他不愿公开病因, 是因为他不想看到自己的艺术因此而受到影响。

しかし、主節の接続表現の使用が必須である場合もある。

[80'] \* 写起小说, 就是因为对昆仑山的挚爱。

[80']の結果節の接続表現が省略できないのは、従属節と主節の表現内容が関係していると思われる。結果節の[写起小説]と原因節の[对昆仑山的挚爱]とは結びにくいので、接続表現の助けを借りなければならないのである。

説明的な原因・理由文に関する分析結果をまとめると、【表 21】に示す通りである。

【表21】「説明的な原因・理由文」の特徴

言語	特徴	接続表現		
		表現の種類	使用可否	備考
日本語	<ul style="list-style-type: none"> <li>倒置構文の形式で、説明性が強く、原因・理由も際立たされている。</li> <li>中国語との等価性が非常に高い。</li> <li>「て」と「ので」にはない用法。</li> </ul>	から	○	
		ので	×	
		ため	○	
		て	×	
中国語	<ul style="list-style-type: none"> <li>倒置構文となり、接続表現の制約が多い。</li> <li>原因を表す“因为”“由于”の前に焦点マーカ―の“是”或いは“就是”が用いられる。</li> <li>また、これらの原因を表す接続表現が結果節にある“之所以”と呼びさせて用いられるのが一般的である。</li> <li>主節の接続表現が必須な場合と省略可能な場合もある</li> </ul>	因为	○	“是因为”“就是因为”の形式がほとんど。
		由于	○	“是由于”“就是由于”の形式がほとんど。
		所以	○	
		之所以	○	
		因此	×	
		于是	×	
(接続表現なし)	×	主節の結果を表す表現のみ省略可の場合あり。		

注:◎はもっとも適切なもの、○は適切なもの、×は表現として適切ではないものを示す。

### 3.2.9 まとめ

ここまでは、「単なる原因・理由を表す文」における両言語の接続表現の使用について検討してきた。8種類の「単なる原因・理由を表す文」においては、日本語の接続表現の「から・ので・ため(に)・て」は文の性質によって、それぞれ制約を受ける場合もあるが、接続表現の機能は中国語の接続表現より広いということが明らかになった。

中国語の因果関係を表す接続表現は表現内容の制約を受けやすく、前後節の意味合いを正確に表そうとすると、前後節の表現内容によって、用いる接続表現が異なってくる。それに対して、日本語の因果関係を表す代表的な接続表現の「から・ので」は、色々な性質をもつ文に使用され、様々な意味合いが表現できる。日本語の接続表現の使用範囲は中国語より広いと言える。

接続表現の使用範囲に関しては、日本語は文の性質の制約を受けず、事態変化、行為の実施もさることながら、感情の表明、人またはものに対する感情的な評価、自然現象の形

成または変化について述べる際にも、それらが生じた原因・理由が明示される。それに対して、中国語は接続表現を使用してもしなくてもよいという場合、使用しなければならない場合、接続表現の使用になじまない場合とがある。特に話者自体の感情の表明、対象（人かもの）に関する話者の感情評価、または自然現象の形成と変化について述べる場合、それらが生じた理由が明示できない。つまり、接続表現の使用が許容されないのである。しかも、「感情評価の原因・理由文」と「自然現象変化の原因・理由文」は中国語では、因果関係を表す複文として扱にくく、それぞれ、「感嘆文」「並列文」として扱われる。このように、中国語の接続表現は機能が日本語の接続表現より狭いだけでなく、使用範囲においても同様に日本語より狭いということがわかる。

### 3.3 推量・判断の根拠を表す文

推量・判断の根拠を表す文において、従属節と主節の関係は、前者Pが「推測・判断の根拠」、後者Qが「話の推測・判断」を表している。「から・ので」は話し手がなぜそのように判断するのかという「推測・判断の根拠」を表す表現として使用されている。この種類の文は、モダリティ要素と関わっているため、「から・ので」がより多く使用されるが、「て」と「ため(に)」は使われる場合と制限を受ける場合がある。判断の根拠を表す文はさらに2種類に分けられる。

- ① 原因を根拠に結果を推量判断するもの
- ② 結果を根拠に原因を推量判断するもの

#### 3.3.1 原因を根拠に結果を推量判断するもの

この種類の文の文末には、話し手の推量と判断を表す表現の「(の) だろう・(の) かもしれない・にちがいない」などが用いられる。原因を根拠として、結果を推測判断する構文なので、「から・ので」だけではなく、「て」と「ため(に)」が使用されることもある。

- (82) 到底人間社会において目撃し得ざる底の伎倆である<sup>から</sup>、これを全能的伎倆と云っても差支えないだろう。 『吾』

- (83) 明治六年なら煙草はまだ専売にされてなかったので、百姓は自家栽培して除虫菊のよ  
うに虫除けにも使ったものだろう。 『黒』
- (84) ここには三組集まっていて、家が三つあるべきかもしれなかつた。 『山』
- (85) ああ云う才気のある、何でも早分りのする性質だからこの位の事は人から聞かんでも  
きっと分るであろう。
- (86) 会社に大きな損失をもたらしたため、T社長は責任をとって辞任するだろう。(自作)

(82)～(86)の主節の文末には、推量を表す表現の「だろう」あるいは「かもしれなかつた」が用いられ、「から」「ので」「て」「ため」節がそれぞれ主節の判断の根拠となっている。この種の文では、従属節は既に事実になっている確定表現であり、主節は事実であるかどうかはまだわからないといった不確かな段階である。つまり、従属節のある事実によって、結果を推測・判断するものである。

一方、中国語では、このような従属節の事実によって、主節を推測する構文はどう表現されているだろう。中国語の「説明因果複文」は、従属節と主節ともに事実であることについて述べるのが一般的であるとする見解が極めて多い。つまり、「説明因果複文」の成立条件として、一般的には従属節と主節が、「P已然、Q已然」といった既実現した関係になっている。しかし、邢福义(2001)<sup>14)</sup>では、因果関係を表す複文における前後節の内容の組み合わせについて、より斬新な見解が出されている。邢(2001)の見解については、第1章で既に述べたが、以下再掲する。

「因果式」は一般的には已然の「因果関係」を表すが、原因と結果はすべて已然表現であるとは限らない。次の3種類の場合がある。

- ①「原因」は已然であるが、結果は未然である。
- ②「原因」は未然であるが、結果は已然である。
- ③「原因」は未然であり、結果も未然である。

実際に、中国語の因果関係を表す複文における前後節の内容は、確かに邢(2001)で述べたように、4種類の組み合わせが存在する。それに関する検討は第6章に譲る。以下、まず従属節が事実であり、それを根拠にして結果を推量する“P已然、Q未然”を挙げてみる。



[87] (因) 由于 飞在最前头的一只鸟处于不利地位, (結) 因此 这些鸟大概要竞相避免担任这个角色。

《当》

一番前を飛んでいる鳥は不利な位置にいるので、これらの鳥はこの役を担当することを互いに避けようとするだろう。(拙訳)

[88] (因) 中国代表团的成员还没有齐全, 对联合国当前的情况也还不十分熟悉, (結) 所以 也许不能立即开始像所期望的那样积极活动。《作家》

中国の代表団のメンバーはまだ揃っていないし、国連の目前の状況についてもまだ十分把握していないので、最初に期待したようにすぐ積極的に活動することができないのかもしれない。(拙訳)

[89] 在对他的调查中, (因) 并未发现他有任何明显的欺诈行为, (結) 因此, 这次灾难的责任也许不该由他一人来承担。《作家》

彼に対する調査において、いかなる明らかな詐欺行為も見つけられなかったから、この災難の責任を彼一人に取らせるべきではないかもしれない。(拙訳)

[90] (因) 把他们送到新墨西哥州是一件很麻烦而又困难的事, (結) 因此 肯定是不现实的。

《读者》

彼らを新メキシコ州に送るということは面倒であり、甚だ困難なことであるので、現実的ではないのにちがいない。(拙訳)

[87] ~ [90] の用例には、それぞれ中国語の「説明因果複文」の代表的な接続表現が使用されている。主節に“大概”“也许”“肯定”といった推量・判断を表す表現が用いられていることによって、結果はまだ未実現の「未然表現」になっていることがわかる。中国語の推量・判断を表すマーカーは文末に現れるのではなく、結果節にある接続表現の後ろに置かなければならないが、結果節の主語の前に置くか、後ろに置くかということにはそれほど制限を受けないようである。

中国語では、主節が「未然表現」である場合は、接続表現の使用に際し、制限を受けるものがある。上掲用例では、“由于”“所以”“因此”といったような論理的かつ説明的な表現が使用されているが、「動的因果関係」しか表せない“于是”などの使用が許容されない。この点に関しては、赵(2003)<sup>15)</sup>では、「静態文」と「動態文」について定義し、“于是”“因此”“从而”の機能的な違いについて検討を行い、以下のように結論付けている。

叙述句描写动作行为或事物的变化、是典型的动态句；而判断句、说明句和评论句描写事物的性状、是典型的静态句。

(中略)

用“因此”的有动态句，也有静态句；而用“于是”、“从而”的都是动态句。

叙述文は動作、行為または事物の変化を描写するため、典型的な動態句である。しかし、判断文、説明文と評論文は事物の性質と状態を描写するため、典型的な静態文である

(中略)

“因此”を用いるものには動態文もあれば、静態文もある。しかし“于是”、“从而”を使用するものはすべて動態文である。

このように、「原因を根拠に結果を推測判断する文」の場合、日本語は「から・ので」がより多く使用されているが、「て・ため」が使用されることもある。それに対して、中国語は論理的かつ説明的な接続表現の使用のみ許されるということがわかる。

原因を根拠に結果を推量判断するものに関する分析結果をまとめると、【表 22】のようになる。

【表22】「原因を根拠に結果を推量判断する文」の特徴

言語	特徴	接続表現		
		表現の種類	使用可否	備考
日本語	<ul style="list-style-type: none"> <li>従属節は確定表現で、主節は未確定表現。</li> <li>従属節の事実(原因)により、結果を推測・判断する。</li> <li>文末に「(の)だろう・(の)かもしれない」などが用いられる。</li> </ul>	から	◎	
		ので	◎	
		ため	○	
		て	○	
中国語	<ul style="list-style-type: none"> <li>従属節の事実(原因)により、結果を推測・判断する。</li> <li>中国語では、論理的かつ説明的な接続表現の使用のみ許される。</li> <li>動的因果関係しか表せない“于是”は使用されない。</li> <li>結果節(主節)の接続表現の後に“大概”“也许”などの推量・判断を表すマーカー用いられることにより結果が“肯定”未然であることがわかる。</li> </ul>	因为	○	
		由于	○	
		所以	○	
		因此	○	
		于是	×	
		就/便	×	
		(接続表現なし)	○	

注：◎はもともと適切なもの、○は適切なもの、×は表現として適切ではないものを示す。

### 3.3.2 結果を根拠に原因を推量判断するもの

「結果を根拠に原因を推量判断するもの」は結果を根拠にし、それによって原因を判断

するという構文関係になっている。日本語では、この種の文に継起関係を伴う因果関係を表す「て」の使用は勿論適さない。また、「ため（に）」の使用も許容されないようである。ただし、この種の文の用例は、データ収集に際し見当たらなかったため、蓮沼(2001)で挙げた用例を参考にして、例を作ってみた。

- (91) 大雪が降ったため・から・ので新幹線は運休になるだろう。 『条件表現』  
(91') 新幹線は運休になっている×ため／○から・ので大雪が降ったのだろう。  
(92) 大雨が降ったので／から／ため、川が増水するだろう。 (自作)  
(92') 川が増水しているので／から、大雨が降ったのだろう。  
(93) 事故があったので／から／ため、電車が止まるだろう。 (自作)  
(93') 電車が止まっているので／から、事故があったのだろう。  
(94) 強い風が吹いていたから／ので／ため、木の葉が大分落ちているだろう。(自作)  
(94') 木の葉が大分落ちているから／ので、強い風が吹いていたのだろう

(91) (92) (93) (94)は原因を根拠に結果を推測、判断する構文になっており、(91') (92') (93') (94')は(91) (92) (93) (94)の主節である「Q」を根拠に、その原因となった過去の出来事の従属節である「P」を推測しているといった構文になっている。つまり、状態結果より、状態が生じた原因を推測判断するということである。「結果を根拠に原因を推量判断する構文」において、日本語は、「ため（に）」が使用できないが、「から・ので」の使用は制限を受けない。「ため（に）」が使用できないのは、「ため（に）」自身の機能と関係していると思われる。「ため（に）」の機能について、于(2000)<sup>16)</sup>では「出来事の先行・後続という継起的な発生に基づく[用言+タメニ]文は、原因表現では、原因が先行、結果が後続という客体的な前因・後果の関係を表し」と記述されている。于(2000)によると、「ため（に）」は「て」と同じく、それによって結び付けられる二つの節は、継起的に発生出来事でなければならないということがわかる。よって、「ため（に）」文は状態結果を根拠に原因を推量判断する構文での使用が許容されない理由もわかるだろう。つまりこの種の構文は、そもそも「ため（に）」の使用条件を満たしていないのである。

一方、中国語では、この種の文において、接続表現の使用もそれほど自由ではないように思われる。ここで、実例を通して検討してみる。

[95] <sup>(因)</sup> 因为・由于 上游的雨下得很大, <sup>(果)</sup> 所以・因此 大坝的水位可能会升高吧 (自作)  
上流は大雨が降った (から・ので・ため)、ダムの水位が上昇するだろう。

[95'] <sup>(果)</sup> 大坝的水位上升了很多, <sup>(因)</sup> 可能是上游下大雨了。 (自作)  
ダムの水位が高く上昇している (から・ので)、上流は大雨が降ったのだろう。

[96] <sup>(因)</sup> 因为、由于 前面发生了重大交通事故, <sup>(果)</sup> 所以・因此 大概有很多警察在吧。 (自作)  
前方に重大な交通事故があった (ため・から・ので)、警察が大勢来ていることだろう。

[96'] <sup>(果)</sup> 前面有很多警察在, <sup>(因)</sup> 大概是发生了重大交通事故。  
前方に警察が大勢来ている (から・ので)、重大な交通事故があったのだろう。

[95][96] は原因を根拠に結果を推測するものであるので、接続表現を使用してもしなくても成立する。ただし、接続表現を使用する場合、「静的因果関係」を表すものに限られる。[95'] [96'] は結果を根拠に原因を推量判断するもので、このような逆推量判断の構文において、中国語では接続表現が使用されないのが一般的である。使用しようとするなら、以下のように直接推量される原因節に「原因・理由」を表す接続表現を置くと自然さを失わない。

[96"] 前面有很多警察在, 大概是 因为／由于 发生了重大交通事故。  
前方に警察が大勢来ている。重大な交通事故があった からだろう。

また、状態結果節に“之所以”を使用し、原因・理由を表す接続表現と呼応させるといった、原因節を推量判断の焦点となる構文も成り立つ。

[96"] <sup>(果)</sup> 之所以 前面有很多警察在, <sup>(因)</sup> 大概是 因为／由于 发生了重大交通事故。  
前方に警察が大勢来ている のは、重大な交通事故があった からだろう。

このように、結果によって原因を推量する構文において、接続表現を使用しない場合と使用する場合がありますが、使用する場合、原因・理由を表す接続表現の位置は日本語とは違って、根拠とする状態結果節ではなく、推量・判断を表す表現と同様に、推量された原因節に置かなければならない。また、状態結果節の先頭に“之所以”を用い、推量

されている原因節の接続表現と呼応させ、原因節を強調する倒置構文となる。ただし、状態結果の先頭に置かれる接続表現は結果を表すものでなければならない。

結果を根拠に原因を推量判断するものについての分析結果をまとめると、【表 23】のように表示できる。

【表23】「結果を根拠に原因を推量判断する文」の特徴

言語	特徴	接続表現		
		表現の種類	使用可否	備考
日本語	<ul style="list-style-type: none"> <li>従属節の事実(結果)により、原因を推測・判断する。</li> <li>「(の)だろう・(の)かもしれない」などを使用。</li> <li>継起性に基づき、因果関係を表す「て」「ため(に)」は使用条件を満たさず、許容されない。</li> </ul>	から	○	
		ので	○	
		ため	×	
		て	×	
中国語	<ul style="list-style-type: none"> <li>従属節の事実(結果)により、原因を推測・判断する。</li> <li>中国語の逆推量判断の構文では、接続表現を使用しないものが一般的。使用する場合は、直接推量される原因節に「原因」「理由」を表す表現を置く。</li> <li>論理的かつ説明的な接続表現の使用が許される。(静的因果関係)</li> </ul>	因为	○	原因節(主節)に置かれる。
		由于	○	原因節(主節)に置かれる。
		之所以	○	結果節に置き、原因を表す表現と呼応。
		于是	×	
		就/便	×	
		(接続表現なし)	◎	

注:◎はもっとも適切なもの、○は適切なもの、×は表現として適切ではないものを示す。

### 3.3.3 まとめ

「原因によって結果を推量・判断する構文」の場合、日本語は「から・ので・て・ため」の何れの使用も観察される。一方、中国語は論理的かつ説明的な接続表現の使用が許されるが、「動的因果関係」のみを表す機能を持つ“于是”などの使用は許容されない。

「結果を根拠に原因を推量する判断する構文」の場合、日本語は「から・ので」の使用は制限を受けないが、継起性に基づく因果関係を表す「ため(に)・て」の使用は適さない。一方、中国語は接続表現が使用されないのが一般的であるが、使用される場合、言うまでもなく、「動的因果関係」を表す“于是”の使用が許されない。原因・理由を表す接続表現が使用される場合、その位置は、日本語とは異なり、推測判断された原因節に置かなければならない。また、状態結果の先頭に接続表現も使用できるが、結果を表す接続表現でなければならない。

### 3.4 発言・態度の根拠を表す文

この種類の文は、話し手がなぜそのような発言をするのか、なぜそのような態度をとるのかという「発言・態度の根拠」を表す用法である。主節の「Q」には、命令・依頼・勧誘・質問など、まだ未実現の事態の実現を聞き手に働きかける表現や、希望・意志など、実現を望む話し手の態度を表す表現が使用される。日本語では、このような「発言・態度の根拠」を表す文において、「から・ので」がその根拠を表す接続表現として用いられるのが一般的である。つまり、日本語では、この種の文は一種の因果関係を表す文として扱われている。これに対して、中国語においては、主節に働きかける表現や願望・意志などといった話し手の態度を表す表現が使用される場合は、前後節の因果関係を前面に出さず、接続表現の使用を極力回避しているようである。このような相違については日本語原文とその中国語対訳を通して検討してみる。

- (97) 「私が笑われるから、帰って頂戴。」 『雪』
- (97a) “人家会取笑我的，你快回去吧！” 《雪②》
- (97b) “人家要笑我的，你回去吧。” 《雪③》
- (98) 「遅くなったからさきに寝なさい」 『挽』
- “晚了，先睡吧！” 《挽》
- (99) 「鼻汁を垂らすのは、ちと酷だから消そう」 『吾』
- (99a) “‘流鼻涕’这词儿太尖刻，去掉！” 《我①》
- (99b) “‘流清鼻涕’这句话也太损啦，抹去吧。” 《我②》
- (100) 「香一柱もあまり唐突だから已めろ」 『吾』
- (100a) “‘香一炷’？太突然，见鬼去吧！” 《我①》
- (100b) “‘一炷香’也太突然，去掉它！” 《我②》
- (101) 「金田令嬢がお待ちかねだから早々呈出したまえ」 『吾』
- (101a) “金田小姐已经等急了，快些交卷吧！” 《我①》
- (101b) “金田小姐等急啦，赶快送呈玉览吧。” 《我②》
- (102) 「僕もいこう、僕はこれから日本橋の演芸矯風会に行かなくっちゃならんから、そこ  
までいっしょに行こう」 『吾』
- (102a) “我也走。我必须立刻到表演矫风会去一趟，陪你走一段路吧！” 《我①》

- (102b) “我也走，我回头还要到日本桥的‘演艺矫风会’去，我陪你一起去吧。” 《我②》
- (103) 「またすぐ上京して来るから、その時ゆっくり相談に乗ろう」 『あ』  
 “很快还要来京，那时再慢慢商量。” 《情》
- (104) 「それより、暑いから、そこの神社の森へでもはいついて下さい」 『あ』  
 “…这么热，还是进到神社树林里好了。” 《情》
- (105) 「今日はお留守番があるから、これから三人で街へ出ましようよ…」 『あ』  
 “今天有人看家，我们三人这就上街去。…” 《情》
- (106) 「…あしたのこともありますから、どうぞ、お休み下さい」 『雁』  
 “你们明天还要辛苦呢，快去休息吧。” 《雁》
- (107) 「…いまから晩まで暇をやるから、ゆっくり独りで考えてみる。…」 『青』  
 “…给你一点时间，从现在到晚上，你慢慢地考虑考虑。…” 《青》
- (108) 「どうぞ。君の想像することって、面白そうだから是非聞いてみたいね」 『ノル』  
 “只管说。你想像的东西怕是很逗儿，我洗耳恭听。” 《挪》
- (109) 「久しぶりだからもっとお話したいもの。何かお話して」 『ノル』  
 “好久没见了，想再谈一会。你说点什么可好？” 《挪》

(97)～(109)の「から」文の主節には、命令・依頼・希望などといった表現が用いられ、従属節は、それらの「発言・態度」の根拠になっている。日本語では、主節の「Q」で「発言・態度」を表明する場合に、それらの根拠になっている従属節「P」が、「から」または「ので」によって示される。「から・ので・て・ため(に)」の4つの接続表現では、「から」は文末制限を受けにくく、文末のモダリティ形式と共起するのが極めて多い。一方、「ので」はモダリティ形式との共起も許されるが、制約を受ける場合がある。また、「て・ため(に)」の場合は、文末制限を受けやすく、モダリティ形式との共起が許容されていない。この点に関しては第1章で既に言及したため、ここではふれないことにする。ここでもっとも述べたいのは、「発言・態度の根拠」を表す文において、日中両言語のとりえ方の違いである。

上例の中国語訳文を見ると、すべて「無標」になっていることがわかる。ここで言う「無標」は、接続表現が使用されていないことを指す。この種の「無標」複文は、接続表現を使用できるが、省略したものではなく、そもそも接続表現の使用との融合性がきわめて低いものである。これは文体または文の性質、接続表現の機能と関係があることが否めない。

中国語では、接続表現を使用すると、蛇足となる場合が多くあり、とりわけ会話の中で、そのような特徴がきわめて顕著である。

日本語は、接続表現が使用されることによって、なぜそのような発言をしたり、態度をとったりするかという根拠が明示されるので、「明示的な発言・態度の根拠文」と言える。これに対して、中国語は接続表現の使用を避け、なぜそのような発言をしたり、態度をとったりするのかの根拠をなるべく表面上に押し出さず、聞き手も、話し手も、従属節が主節の「発言・態度」の根拠になっているということを認識しておらず、単なるひとつの状況と捉えているように思われる。そこで、「発言・態度の根拠」を表す文が、中国語の中で「因果関係」を表す複文の一種だと認められるかどうかは、検証する必要があると思う。日本語と同様に、「どうして？」疑問文を使用して、検証を試みる。(98)を例として再掲し、その訳文の主節について質問を試みる。

(98) 「遅くなったからさきに寝なさい」

“晚了，先睡吧！”

A：先睡吧！ （さきに寝なさい）

B：为什么？ （どうして？）

A：因为时间太晚了。（随分遅くなったから）

中国語訳文は、従属節が「どうして？」の質問文の答えとして成立できる。よって、中国語の「発言・態度の根拠」を表す文も、因果関係を表す複文の一種だと認められる。ただし、この種類の文には接続表現の使用がなじまず、前後節の関係が認識されにくいいため、同種類の文でも、日本語は「明示的な発話・態度の根拠文」になっているのに対して、中国語は、「暗示的な発話・態度の根拠文」になっている。

以上の分析によって、中国語母語話者の日本語学習者にとっては、相手への働きかけの場合に、「なぜそのような発言をしたりするのか」といったような認識はあまりされておらず、この種の文の接続表現を脱落させたりすることが予想される。この点に関する考察は、第8章に譲る。

以上、「発言・態度の根拠」を表す文について検討してきた。分析結果を【表24】のように表示できる。



【表24】「発言・態度の根拠を表す文」の特徴

言語	特徴	接続表現		
		表現の種類	使用可否	備考
日本語	・主節には命令・依頼・勧誘・質問・希望・意志などの働きかけや実現を望む話し手の態度を表す表現が使用されることが多い。 ・根拠を示す従属節では、文末制限を受けにくく、「から」を用い、文末の「モダリティ形式」と共起する例が多い。「ので」も使用されるが制約を受ける場合あり。「て」「ため」は許容されない。 ・日本語は「明示的な発言・態度の根拠文」になっている。	から	○	制約を受ける場合もある。
		ので	○	
		ため	×	
		て	×	
中国語	・接続表現の使用がなじまず、会話文で特に顕著。蛇足になる場合が多い。 ・「どうして(为什么)」の質問文の答えとしてのみ接続表現の使用が成立する。 ・中国語は「暗示的な発言・態度の根拠文」になっている。	(接続表現なし)	○	

注:○は適切なもの、×は表現として適切ではないものを示す。

### 3.5 両言語の接続表現の機能および使用範囲の異同

3.2 から 3.4 までの考察を通して、日本語と中国語の因果関係を表す複文における接続表現の機能的な異同、表された原因・理由・根拠の類似性と相違性、また接続表現の使用範囲の相違性を明らかにした。考察結果をまとめると、以下ようになる。

#### 3.5.1 両言語の接続表現の機能の異同

日本語の接続表現の機能は中国語より広く、表現内容の制約を受けにくいいため、多様な原因・理由を表せる。たとえば、「から・ので」については、事態原因、行為の理由、自然描写文、ネガティブな心理的要素を伴う行為の理由文、継起関係を伴う行為の理由文、発言・態度の根拠を表す文などで使用した場合、いずれも自然であり、意味合いも正確に伝えることができる。これに対して、中国語の接続表現は表現内容の制約を受ける傾向がある。前後節のニュアンスを正確かつ自然に聞き手や読み手に伝えようとすれば、典型的な接続表現の“因为、所以、因此”などのみでは、表現しきれない。前後節の表現内容によっては、心理的色彩を帯びる副詞の“只好、只得”や動的因果関係を表す“于是”、意味関係を示さず接続機能のみを持つ“就/便”などの使用が必要とされる。両言語の接続表現の機能的な異同についてまとめると【表 25】のようになる。

【表25】因果関係を表す複文における接続表現の機能

因果関係を表す複文の種類		日本語		中国語	
		主な接続表現	備考	主な接続表現	備考
因果関係を表す複文	①事象原因を表す文	から、ので、ため、て	もつとも典型的な因果関係構文。	因为・由于・所以・之所以・因此・于是・就・便・只好・只得・使・使得など (無標)	典型的な因果複文。日本語ともよく対応する。
	②ネガティブな心理的要素を伴う行為の理由文	から、ので、ため、て		只好・只得・因为・由于	心理的色彩を帯びる“只好・只得”の単独使用もしくは“因为・由于”の呼応。
	③継起関係を伴う行為の理由文	から、ので、て、(ため)	「て」が最適。「ため」は持続性ある場合のみ可。	于是・就・便	接続表現は主節に置かれる。継起性を持つ動詞的因果関係となる。
	④自然現象変化と状態変化の原因・理由文	から、ので、ため、て		(無標)	接続表現は使用されない。
	⑤感情表明の原因・理由文	から、ので、て	「ため」は書面語に多用されそぐわわない。	(無標)	問いかげに広げる場合を除き、接続表現は使用されない。
	⑥感情評価の原因・理由文	から、ので、て	「ため」は書面語に多用されそぐわわない。	(無標)	「感嘆文」となるため、接続表現は使用されない。
	⑦心理状態の変化を引き起こす原因・理由文	から、ので、ため、て	「て」の使用が多い。	使・使得・因为・由于	動詞の“使・使得”単独か、“因为・由于”と呼応して用いられる。
	⑧説明的な原因・理由文	から、ため	倒置構文。「て」と「ので」にはない用法。	因为・由于・所以・之所以	倒置構文で“是因为”“就是因为”の形式が殆ど。“之所以”と呼応させて多用される。
	⑨原因を根拠に結果を推量判断する文	から、ので、ため、て	「から、ので」がより多く使用される。	因为・由于・所以・因此	中国語では、論理的かつ説明的な接続表現の使用のみ許される。
	⑩結果を根拠に原因を推量判断する文	から、ので	継起関係を伴う「ため、て」は使用条件を満たさない。	(無標)・因为・由于・之所以	静的因果関係。接続表現不使用が一般的だが、原因節に原因を表す接続表現を置くこともある。
推測・判断の根拠を表す文	から、ので	文末制限を受ける「ため、て」は許容されない。	(無標)	接続表現の使用はなじまない。会話文で特に顕著。	
発言・態度の根拠を表す文	から、ので	接続表現の機能が広く、文法的な制約を受ける場合があるが、表現内容の制約を受けにくいという特徴を持つ。			
それぞれの言語における特徴					・接続表現の使用は表現内容の制約が多く、前後節の意味関係のニュアンスを的確に表そうとする場合、接続表現の使用は表現内容への考慮が求められる。

### 3.5.2 両言語の接続表現の使用範囲の異同

日本語の原因・理由を表す接続表現の使用範囲は中国語より広い。日本語は文の性質の制約を受けず、因果関係を述べる典型的な文だけでなく、自然描写文、モダリティ形式と関係している文、感情評価の原因・理由文も因果関係の一種だと扱え、因果関係を表す接続表現によって、前後節の意味関係が示されている。

一方、中国語では接続表現の使用は、文の性質の制約を受ける場合があり、因果関係を表す複文として認めにくいものがある。日本語と同様の枠組みの中で、日本語では因果関係を表すものとして認められるが、中国語では因果関係を表すものとして認められにくいケースがある。特に自然描写文や感情評価の原因・理由文の場合は、日本語は自然現象の変化や、話者の強い気持ちが込められ、人またはものに対して評価する場合、そういった変化や評価の原因・理由について、接続表現によって明示されるが、中国語はそういった原因・理由を示さない。中国語では、それらの文にある因果関係を最大限に潜在化させ、論理関係を示すことより、真に迫るシーンを描き出すことや、話し手の気持ちを強く感じさせることを重視する。そのため、自然現象について描写する場合は、表面にある景色そのものに視点を置き、リアルに描出し、背後に潜在している形成原因が認識されないのが一般的である。感情評価の原因・理由文の場合は、話し手の気持ちを強く前面に押し出すことを重視し、そのような気持ちが生じた理由を最大限に潜在化させるというより、そもそも潜在している原因を認識しておらず、単なる一方的な状況説明だと捉えているといったほうが的確である。このように、本来因果関係を表す複文だと認識しにくいものにおいては接続表現が用いられにくい。よって、中国語の接続表現の使用範囲は日本語より狭いということがわかる。両言語の接続表現の使用範囲に関して、【表 26】のようにまとめられる。

【表26】因果関係を表す複文における接続表現の使用範囲

因果関係を表す複文の種類		日本語		中国語	
		使用可否	備考	使用可否	備考
単なる原因・理由を表す文	①事態原因を表す文	○		○/×	動的因果関係を表す“于是・就・便”などは使用されない。
	②ネガティブな心理的要素を伴う行為の理由文	○		○	
	③継続関係を伴う行為の理由文	○/△	「ため」は制約あり。	○/△/×	静的因果関係を表す“因为・由于”などは使用されない。“所以”などは継起性が弱まる。
	④自然現象変化と状態変化の原因・理由文	○		×	接続表現の使用は論理性が強く、描写性に影響を及ぼすため、望ましくはない。
	⑤感情表明の原因・理由文	○/×	「ため」はそぐわない。	×	一方的な話の中では接続表現は使用できない。
	⑥感情評価の原因・理由文	○/×	「ため」はそぐわない。	×	感情評価の理由は明示しない。(感嘆文)
	⑦心理状態の変化を引き起こす原因・理由文	○		○/×	動詞の“使・使得”と“因为・由于”を呼応して使用。結果を表す接続表現は使用しない。
	⑧説明的な原因・理由文	○/×	倒置文、「ので・て」は使用しない。	○/×	“是因为”“就是因为”などの形式が殆ど。“之所以”と呼応することもある。“因此”などは使用しない。
	⑨原因を根拠に結果を推量判断する文	○		○/×	動的因果関係しか表せない。“于是”などは使用されない。
	⑩結果を根拠に原因を推量判断する文	○/×	継続関係を含む「ため・て」は使用しない。	○/×	動的因果関係しか表せない。“于是”などは使用されない。
発言・態度の根拠を表す文	○/×	文末制限を受ける「ため・て」は使用されない。	×		
それぞれ別の言語における特徴		<p>・様々な事象や物事の変化について述べる際、それらが生じた原因・理由を明示するのが一般的であり、接続表現の使用範囲が広い。</p>		<p>・事象や物事の発生に対して、表面的に捉え、内面に潜在している発生の原因・理由に関しては、意識しない場合がある。したがって、接続表現の使用範囲は日本語より狭い。</p>	

## 注

### 第3章

- 1) 南 (1993 : 232-233) 参照。
- 2) 田窪 (1987 : 38-39) 「統語構造と文脈情報」『日本語学』5 参照。
- 3) 益岡 (1997 : 127) 『複文』による。
- 4) 蓮沼 (2001 : 145) による。
- 5) 劉 (1991:732-733) による
- 6) 「説明因果複文」偏句は原因を説明し、正句はそれによって生じた結果を説明する。  
刘月华他(1991:732)による。
- 7) 「推断因果複文」偏句が原因・理由を表し、正句はそれに基づき推断する。刘月华他  
(1991:733) による。
- 8) 「単なる原因・理由」を表す文に関する分類は、永野 (1952)、蓮沼(2001)を参照した上、  
用例の前後節の表現内容に注目し、観察された傾向を踏まえて分類を行った。
- 9) 王起瀾他(1989:195-196)《汉语关联词词典》福建人民出版社による。
- 10) 赵恩芳 (1998:244) による。
- 11) 赵恩芳 (1998 : 99) による。
- 12) 吕叔湘(1999 : 495)《现代汉语八百词》商务印书馆 参照。
- 13) 邢福义 (2002:648-650) 参照。
- 14) 詳しくは 邢福义 (2002 : 59-60) 参照されたい。
- 15) 赵新 (2003 : 27) 〈“因此、于是、从而”的多角度分析〉《语文研究》第1期。
- 16) 于(2000 : 39)